

第26回

眼鏡型の拡大鏡

眼鏡ではないので、掛けたまま歩くと危険です

事件事例

- ・80歳代の父が眼鏡型の拡大鏡を掛けたまま歩行し転倒、^{ろっこつ}肋骨を骨折した。(60歳代、女性)
- ・眼鏡型の拡大鏡を使用したところ、目に違和感があり、チカチカした。(60歳代、男性)

●問題点とアドバイス

眼鏡型の拡大鏡は、手が届きそうなところにある物を拡大して見るためのもので、視力や老眼等を矯正してピントを合わせるためのものではありません。PIO-NET^{*1}には、「表示倍率どおりに拡大されない」「使用中に目がくらくらした」など、眼鏡型の拡大鏡の見え方に関する相談が419件^{*2}寄せられており、60歳以上からの相談が9割を占めています。なかにはそれが原因でけがなどをした事例も含まれていました。そこで眼鏡型の拡大鏡の見え方の特性をテストしました。

(1) 視力や老眼を矯正するものではないので、掛けたまま歩くと危険

レンズの光学中心^{*3}からピントが合うまでの距離(焦点距離)は、テスト対象の全銘柄とも25～51cmと手の届く程度の距離で、焦点距離より遠くの物ははっきりと見えませんでした。また、見え方も通常の眼鏡とは異なるので、掛けたまま歩くと転倒のおそれがあります。

(2) 表示倍率どおりに拡大されない

眼鏡型の拡大鏡を掛けても、表示倍率どおりに拡大されないという相談があり、掛ける前と掛けている間の見え方を調べました。焦点距離

と同じ距離で観察対象を見たところ、掛けても表示倍率どおりに拡大されず、表示倍率どおりに拡大して見るためには、掛ける前より、見る対象に近づく必要がありました。

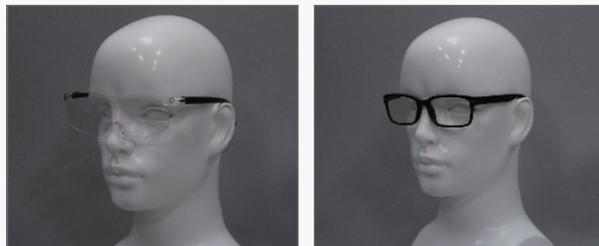
(3) 眼精疲労などが起きる可能性

^{どうこう}瞳孔間距離(左右の瞳孔の中心間の距離)と眼鏡型の拡大鏡の光学中心間距離(左右のレンズの光学中心間の距離)が合っていない場合、眼精疲労、頭痛、めまい等が起きることがあります。

既製品の眼鏡型の拡大鏡は、一人一人に合わせて作られているものではありません。購入前に使用感を確認し、眼鏡を使用している場合は、眼鏡との重ね掛けも試してみましょう。

もし、目や見え方に異常を感じた場合は使用を中止して、眼科医の診察を受けましょう。

写真 眼鏡型の拡大鏡の外観例



レンズ一体型の例

レンズ分離型の例

*1 PIO-NET(パイオネット：全国消費生活情報ネットワークシステム)は、国民生活センターと全国の消費生活センター等をオンラインネットワークで結び、消費生活に関する相談情報を蓄積しているデータベース

*2 2015年4月以降受付、2020年10月末日までの登録分。件数は特別に事例を精査したもの

*3 光が屈折せずに通過する点

参考：国民生活センター「眼鏡型の拡大鏡による見え方－視力・老眼等を矯正できるものではありません－」(2021年2月4日公表)

http://www.kokusen.go.jp/test/data/s_test/n-20210204_1.html